卒業論文

富山県南砺市利賀村の実態

2018年1月

京都経済短期大学 経営情報学科

今瀬政司ゼミナール 2回生

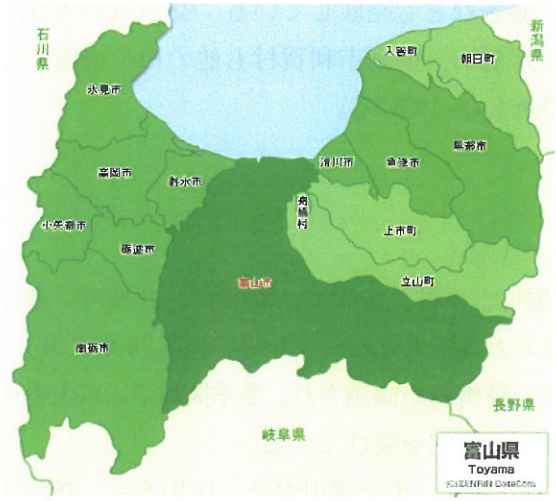
清水 りか

卒業論文「富山県南砺市利賀村の実態」

目次

1 章：富山県の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p1
2 章：富山県南砺市利賀村の実態・・・・・・・・・・・・p2
3 章：利賀村の歴史・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p4
4 章：もたらされた収益変化・・・・・・・・・・・・・・p4
5 章：抱える問題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p5
6 章：問題に対する打開策・・・・・・・・・・・・・・・p6
7 章：その他の主だった取り組み・・・・・・・・・・・・p7
8 章：個人的見解・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p11
参考資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p13

1章：富山県の概要



富山県は日本列島の日本海側に面し、北陸地方に属する。県庁所在地富山市をはじめとし、高岡市、魚津市、氷見市、滑川市、黒部市、砺波市、小矢部市、南砺市、射水市、舟橋村、上市町、立山町、入善町、朝日町の10市4町1村からなる。

今回注目する芸術分野に関して、県内の南砺市利賀村以外の地域と特徴について下記に記した。

富山市は多くの化石発掘が行われており、市内の化石発掘に関する博物館は「富山市科学博物館」と、「八尾化石資料館海韻館」がある。また市内の八尾町のおわら風の盆は無形文化財に選定されている。高岡市には富山市と同じく、北陸新幹線が開通されており、芸術面では、金属でありながら変形可能な「能作」鋳物が特徴的である。魚津市には、過去の地盤変化により興隆した、海岸付近の木々が埋没した「埋没林」の様子を展示、保管している。氷見市は芸術文化に秀でないまでも、海鮮物が多く取れ、日本海の豊富な水産資源によって生まれた魚が取れる。特に春はほたるいか、冬は寒ブリがとれ、寒ブリはブランドとして全国の料亭で食材として調理されている。滑川市は氷見市以上にホタルイカがとれ、海面付近は国の特別天然記念物に指定されている。黒部市には日本一を誇る黒部ダムが建設されており、日本国内、またそれ以上に海外からの観光客も多く足を運ぶ。黒部ダムは高さ186kmから毎秒10立方メートルの水量が流れており、黒部川を流れ、県の電力発電の一部をまかなっている。「黒部の太陽」として映画が公開されてから、知名度が全国区に広がるようになった。砺波市は欄間などをはじめとした、木彫りの井波彫刻が、富山の持ち家数と割合に伴って需要があり、県内で広まっている。射水市は、江戸時代の頃に北前船の中継地として海運や漁業で栄えていたため、街路と街路の間に水が引かれ、「富岩運河」という愛称で親しまれ、今でも船の交通が行われており、一種の観光スポットになっている。また「世界でもっとも美しいスターバックスコーヒーショップ店」があるとして有名でもある。また古くからの酒屋を改築し、現代風のイタリアン料理店を担い、外装は変えず内装のみを改装し、レストラン店舗として活用しているお店もある。

そして、南砺市利賀村である。利賀村の演劇だけではなく、利賀村を超えた更に奥には、世界遺産合掌村が鎮座している。またそばや、養蚕なども発展している。交通はいささか不便ながらも、山々を開けた先に広がる風景は圧巻で、南砺市利賀村も他の市や場所に劣らず、国内外問わず、多くの観光客が訪れる場所となっている。

2章：富山県南砺市利賀村の実態

利賀村は、富山県西部にある南砺市に位置している。

南砺市は平成16年11月1日に福野町、城端町、平村、上平村、利賀村、井波町、井口村、福光町の旧8町村が合併し誕生した。人口は5万3千人となっている(平成28年7月)。冬には市内山間部が豪雪地域の指定を受ける程の積雪量が観測され、冬季間は3m以上もの積雪となる場合もある。また市内全域が過疎地域の指定を受けている。

市内を流れる代表河川は3つの一級河川水系であり、小矢部川水系、庄川水系、神通川水系の河川が北流している。小矢部川は、東側に位置する庄川扇状地の扇端と西側にある山々との間を曲がりくねり、数々の支川と合流しながら高岡市の西側を貫流し日本海に流れでている。石川県との県境にある大門山(1,572km)に源を発している。本市では、福光、福野、城端、井口、井波の各地域が小矢部川流域に含まれている。庄川は、利賀地域で利賀川等の大小の川を集めながら庄川峡を作っている。利賀川と合流したのち、庄川扇状地の東端、高岡市と砺波市の東側、新湊市の西側を北流し日本海に流れ出ている。特に、庄川上流部では、豊かな水を利用した電源開発が行われ、御母衣ダム(岐阜県大野郡白川村)や祖山ダム(南砺市)、小牧ダム(砺波市)等17ヶ所の発電ダムが設置されている。

そして、神通川水系百瀬川。神通川は、岐阜県高山市の川上岳に源を発し、飛騨高地の中を北に流れている。富山県境付近の神通峡あたりで高原川を合わせ、富山市笹津付近で富山平野に出ている。平野部では直線的に北流し、富山湾に注ぐ長さ120km、流域面積2,720キロ平方メートルの一級河川である。百瀬川は、利賀地域を流下し、下流では山田川と名を変え、富山市三ツ瀬付近で富山平野にでる。その後、富山市羽根付近で神通川の左支川井田川と合流する。

五箇山と呼ばれている山間部は、平成7年11月に世界文化遺産に登録された合掌造り集落や民謡の宝庫として知られている。また、屋敷林に囲まれた家々が点在する平野部は、全国でも珍しい散居村の風景が広がる独特の集落景観を形成している。その歴史は古く、口碑と1806年（文化３）北茎著「奇談北国巡杖記」において「平家の類葉落居して村民となり今に子孫あまたある事にて官名を名乗る」とあるように歴史を鑑みることができる。今でも、独自に発展した養蚕産業や、塩硝、和紙産業の片鱗を垣間見ることができる。現状使われていない合掌造りの家の屋根裏にあがり、養蚕の様子を直に観察できることから観光客の足は途絶えない人気スポットとなっている。

利賀村に至るための所要手段は車での移動か最寄り駅が最適である。富山市八尾町にある越中八尾駅からの専用バスを利用することができる。車での所要時間は富山市中心市内

から車で2時間、また越中八尾駅からのバスを使用した場合は1時間ほどの時間を有する。

利賀村は、劇団SCOTを始めとした演劇家のため、南砺市利賀村上百瀬地内の百瀬川の一帯に広がる敷地面積12万4千平方メートルの南北に広大な県立の公園「富山県利賀芸術公園」を建設し、場所を提供している。日本だけにとどまらず、世界数10ヵ国以上の演劇家が夏季、冬季に集い、演劇の技を磨く。

富山県利賀芸術公園内には様々な施設がそろっている。

代表的な建造物の一つに、野外劇場が挙げられる。この施設は、第1回世界演劇祭のために建設された劇場で、古代ギリシャに原型を求めた本格的な野外劇場である。舞台の背景には、池や山があり、舞台照明や花火でそれらが浮かび上がると、観客が宇宙的なスケールの空間に座しているような印象をもつ劇場である。

「利賀山房」は、もとは古い合掌造りであったが、劇場に改造し、新たに入口にはエントランス・ルームとしてのホール棟が増築された。エントランスは、三面ガラス張り、大階段を擁した「明」の空間である。劇場内部は、日本の能舞台の形式に近いが、構造材はすべて黒く、全体に「闇」の雰囲気がある。収容人員150人となっている。同じく、もとは古い合掌造りであったものを改造した施設に新利賀山房があり、こちらは合掌造りそのものが日本最大の規模となっており、利賀山房よりも収容人数も大きく、250名となっている。

利賀創造交流館・芸術劇場は、長年、富山県立利賀少年自然の家として活用されてきたが、劇場や稽古場、会議室、宿泊施設をもつ総合的な文化施設として再出発した。芸術劇場は、床、壁、天井が新利賀山房や利賀山房と同様に黒一色で統一されているが、コンクリート造りのブラックボックス・スタイルの劇場である。あらゆる方向から舞台構築が可能な、自由度の高い空間となっている。収容人数は150人となっている。

利賀村の合掌造りには、相倉・菅沼の合掌造り集落と名づけられており、岐阜県白川村の荻町集落とともに1995年12月にユネスコの世界遺産に文化遺産として登録されている。地域の風土のなかでできあがってきた合掌造り家屋は約100～200年前に建てられたもので、もっとも古いものでは築後400年を誇る。

現在、相倉には20棟、菅沼には9棟が現存し、住民が現在も生活をしており、住まう人々の風俗・慣習と歴史的建築物とが一体となった、日本の昔ながらの暮らしが継承されている。

そういった現在住まう住宅以外に、都市部に移った人々がかつて過ごして合掌住宅を再利用したのが、富山県利賀芸術公園の基盤となっている。

利賀村以外の合掌造りは岐阜県にもあり、そちらも世界遺産として指定されている。

他にも国重文の村上家、国重文の羽馬家、五箇山民俗館、国重文の岩瀬家、合掌造りの民宿、相倉民俗館の1・2号館、塩硝の館、五箇山生活館、流刑小屋、寿川念仏道場、合掌の里、県重文の羽馬家などが保護され、改築され、再利用されている。

合掌造り以外の史跡遺産に寺・神社には城端別院、善徳寺、井波別院、瑞泉寺、光徳寺、

安居寺、越中一宮、高瀬神社、行徳寺、国重文、白山宮本殿、街並み・散策道には、井波八日町通り、城端今町通り、水車ウォッチングロード、瞞着川（だまし川)、古道や道宗道には塩硝の道、蓮如の道、旧五箇山街などがある。

このように利賀村が誇る「富山県利賀芸術公園」は様々な施設が併設されており、多様な目的と演出表現の場として利用されている。そういった裏には利賀村に着目した、SCOTの鈴木氏の尽力、富山県の協力、利賀村の積極的な活動が功を奏したといえよう。

3章：利賀村の歴史

富山県南砺市利賀村の広範囲の土地を利用し、かつグローバル的に演劇活動を行った背景に劇団 Scot の姿がある。

富山県は、1973 年合掌造りの民家 5 棟を百瀬川流域に集め、「利賀村合掌文化村」を利賀村に誕生させた。そして、1966 年に早稲田小劇場を設立した、演劇家鈴木忠志が拠点地として、1976 年に合掌文化村を訪れる。これを機に民間劇団活動と過疎対策活動事業が両輪となって活動がスタートする。その 6 年後の 1982 年に世界演劇祭「利賀フェスティバル」がスタートした。この試みは日本で初めての国際演劇祭を始めたこともあり、大反響のうちに成功した。またこのフェスティバルは、現在でも毎年行われている。1986 年に鈴木忠志とヨーロッパ文化センター委員長ペリクレス・ニアコウの仲介により、利賀村と演劇発祥の地であるギリシアのデルフィ市が姉妹都市盟約を締結され、国際舞台芸術研究所とカリフォルニア大学の共同事業として、日米の知的、文化的交流や芸術的協力関係発展のための合意書を取り交わされた。このことにより、さらに国際的な文化人を招く機会が増えるようになった。1994 年に「利賀合掌文化村」を「富山県利賀芸術公園」と名称も新たに、県立化する運びとなる。2000 年に公益財団法人舞台芸術財団演劇人（JPAF）が設立され、同時に若手演出家を顕彰する演出家コンクール、又富山県内中高大学生の演劇指導を中心としたプログラムも開催される。2012 年には「アジア演出家フェスティバル」が開催され、「TOGA アジア舞台芸術センター」が設立され、アジア方面との関係性もより親密なものとなる。翌年、2014 年には、利賀アジア芸術祭、アジアの優れた作品を上演する催しが 8 月～9 月の二か月間に渡って行われた。

このように利賀だけで行われた催しを始まりとして、日本国内以上に多くの海外の演劇家とのセッションも増え、今では国際的な交流が目まぐるしい。

4章：もたらされた収益変化等

1982～1999 年で、18 回開催された利賀フェスティバルの総参加者数は約 17 万人。第 1 回利賀フェスティバルでは 6 か国 12 劇団、約 13000 人が参加した。利賀サマー・アーツ・プログラム、Scot サマー・シーズンの活動、15 年間での参加者数は 20 万人となっている。参加交流団体である、利賀演劇人コンクール、アジア演出家フェスティバル、利賀インター・ゼミ、高校生演劇講習、中高生演劇ワークショップ、県民鑑賞会、加賀演劇塾の参加

人数は毎年変わりなく、関係性を保っている。

また、2013 年に設立した、TOGA アジア・アーツ・センター支援委員会は TOGA アジア・アーツ・センターを活性化しようと、富山県内の民間企業が中心となって発足されたものであり（YKK,北陸電力等々）、その TOGA アジア・アーツ・センターは南砺市が構想している TOGA 国際芸術村を核としたクリエイティブ・ビレッジ構想、利賀地域をアジアにおける世界の舞台芸術の聖地にすることを目指す構想と似通っているため、相互協力の関係にある。また、富山県は TOGA アジア・アーツ・センターと南砺市、両方と連携をとる関係性にある。一方で、フェスティバルや、演劇鑑賞の際の料金は一切取っていない。あくまで、ご随意にという姿勢をとっている。

クリエイティブ・ビレッジ構想とは南砺市が地域再生を最終目標として掲げる、確かな歴史文化と未来が融合する、創造的な地域コミュニティづくりであり、また、日本の原風景、豊かな精神文化に触れ、懐かしき未来モデルの構築を理想としている。市民参加、グローカルな交流、創造と革新、SCOT サマー・シーズン、在地している天竺温泉のリノベーション、伝統の暮らし体験、芸術を目指すアジアの若者との交流、上質な食空間、山菜採り体験など利賀村でしか味わえない体験を通して、観光客リピーターを増やそうというものだ。

TOGA 国際芸術村を活用した地域活性化と未来創生の主な課題はアジアを代表する舞台芸術の拠点づくりがなせるかなせないかだ。先に挙げた富山県「舞台芸術特区 TOGA 構想」の推進と南砺市「TOGA 国際芸術村構想を核としたクリエイティブビレッジ構想」の推進と鈴木忠告を代表とする TOGA アジア・アーツ・センター、そしてそれを民間企業が支援する TOGA アジア・アーツ・センター支援委員会が連結しあうことが大切だ。

5 章：抱える問題

利賀村の土地を生かした演劇活動は SCOT を筆頭に多くの活動が展開されたことから成功したといってもいい。しかし一方で、利賀村に住む、その土地の人口は年々減少している。

国立社会保障・人口問題研究所が推計した日本の人口は、2014 年現在の 12,722 万人から 2040 年には 8,674 万人まで減少するとされている。つまり、2040 年までに 30 代の女性が 50%以上減少する市町村が全体の約半数（896 市町村）になるとされており、これら地域は消滅可能性都市とされ、いくら出生率があがったとしても人口維持は困難であり、将来的には消滅する可能性が高いとされている。

この消滅可能性都市とされている都市が富山県には、氷見市、小矢部市、上市町、朝日町、そして利賀村が位置する南砺市とされている。超高齢化の兆しもある。全国の人口が占める、高齢者、いわゆる 65 歳以上の人が 23%なのに対して、利賀村の高齢者の占める率は、大きく上回り、41.6%となっている。また、2004 年から 2015 年の男女、そして世帯数の増減数を見てみると、男女、そして世帯数ともに 100 以上の減少がみられることがわかった。

一方で、観光で訪れた人の宿泊数にそこまでの落ち込みは見えない。富山県全体で見たとき、50代～60代となっている。南砺市の観光動向については、観光客入込数や観光消費額といった市の観光統計が未整備なため、「富山県観光戦略基礎調査データ平成19年12月」（富山県観光課）、「富山県五箇山ギャップ調査報告書」（2011年11月（株）リクルート）より整理した。「50代」25.7%と「60代」24.5%で、全体の約半分を占めている。「30代」「40代」はともに1割強で、特に冬期の来訪が多くなっており、スキー客層が多いと考えられる。逆に50代以上では、冬期の来訪が他の時期と比べると減少しており、メインターゲットとなる団塊世代層、高齢者層において、冬期の誘客戦略が重要であるといえる。交通手段に関しては、県外（海外含む）からの旅行者の主な交通手段は、「自家用車」が47.4%と最も多く、ほぼ半分の人が利用している。北陸新幹線の開通により鉄道等の公共交通利用の増加が期待されているが、自動車による観光は、南砺市において大きなウェイトを占めるものと考えられ観光者全体の半分が宿泊していっているという傾向も伺うことができる。

観光客の旅行満足度は、「県内交通機関」、「接客」、「宿泊」、「お土産」、「食べ物・料理」、「観光施設・観光資源」すべての項目全体を合わせた旅行満足度は、「大いに満足」、「満足」を合わせた満足度が57.%、「ふつう」が39.1%、不満度は3.6%となっている。項目別で見てみると、「大いに満足」、「満足」を合わせた満足度が半数を大きく超えているのは、「食べ物・料理」「宿泊」で、それぞれ71.6%、67.1%となっています。一方で「県内交通機関」が「不満」と「大いに不満」の合計が9.7%と最も高く、「お土産」については「ふつう」が最も多いなど、満足度は低い状況である。

これは利賀村が力を入れている、先に述べた、旧合掌造りを改築した建設業以上に、宿泊業、サービス業、飲食の分野に力をいれている点が功を奏したのではないだろうか。

だが観光業に頼り、地元の人間が日々離れていることを直視しなければ、その観光業を担ってくれる人さえ出払ってしまうことになり本末転倒だ。だが利賀村の中で雇用を増やすことは厳しい。夏にフェスティバル、冬にワークショップがあるといってもその時期以外の利賀村の活動で主だったものはない。

6章：問題に対する打開策

南砺市は、世界遺産の「五箇山合掌造り集落」をはじめとして、「城端」や「井波」といった歴史的な街並み、寺社等の歴史資源、美術・工芸品等の文化資源など、世界的に誇れる文化を多く有しており、金沢や白川郷、高山などの周辺主要観光地に近接し、地の利的にも多くの来訪者が期待されている。さらに、散居村といった独特の農村風景から、平野から山間部にまたがる多様で豊かな里山の環境を有している。祭りや食などの地域固有の文化資源や、「結」と呼ばれる助け合いの精神は、この様な自然環境の中で育まれてきたもので、本市の誇るべき美しい田舎の文化といえる。

一方で、五箇山合掌造り集落における後継者不足の課題など、少子高齢化による祭りや

伝統文化の継承に対する不安も高まっている。今後は、より多くの人々との交流のうえで、地域を形づくってきた歴史や文化を受け継いでいくことが重要であり、そのような交流を軸とした視点で観光を推進していく必要がある。そのための方向性として、南砺市が次の3点を基本理念として掲げている。市民からはじまる交流観光まちづくり、奥深い魅力によるファン・リピーターづくり、地の利を生かした広域交流観光まちづくりの 3 つである。基本コンセプトは「なんと！幸せのおすそわけ」市民一人ひとりが南砺の魅力を理解・再確認し、その魅力を来訪者に伝えるという、シンプルで力強い関係が結ばれることにより、郷土に対する愛着とおもてなしの心が育まれ、人が人を呼ぶ交流観光が実現するものと考えている。

舞台芸術の世界的な拠点である利賀芸術村など、豊富な観光・文化資源を有しているが急速な人口減少や過疎化・少子高齢化に伴って地域コミュニティの維持存続が困難になりつつある。この現状を打破するため、文化芸術資源を最大限に活かし、海外からの VIP にも対応できるような長期滞在型の観光拠点を整備し、南砺ブランドの商品開発を進めることによって持続可能で創造的な地域コミュニティの構築を図るとした。

また富山県全体の特色として、土地柄、とても住みやすい場所であることも明らかだ。列挙される項目 3 つほとんどが全国ランキングの上位に食い込んでいることがわかる。火災発生件数の少なさは 1 位であり、保育所入所率も上位であり、なによりも待機児童が 0 なのである。

また幸福度知数では法政大学調べによれば富山県が全国 2 位、2013.6.4 の「エコノミスト」に「興味深い富山モデル」として評価する報告書が掲載された。

7 章：その他の主だった取り組み

これ以上の人口減少削減を図るために南砺市利賀村では、「地域包括ケア」を行っている。人口流出の実態と推移を詳細に調査し、実状を把握したうえで的確な医療措置や介護施設の設置を行っている。

平成 11 年に富山県の城端町・平村・上平村・福光町と岐阜県の白川村で「南砺広域連合」を設立する。平成 14 年は「公立南砺中央病院」開院し、平成 24 年に「地域包括医療・ケア局」を設置するはこびになった。

地域包括医療・ケア局を主体とし、医療課、南砺市民病院、公立南砺中央病院、地域包括科の 5 つの機関に役割を分担した。医療課は、南砺家庭･地域医療センター、平診療所、上平診療所、利賀診療所、そして訪問看護ステーションの管理、統制を、地域包括科は井口デイサービス、五箇山在宅介護支援センター、平高齢者生活福祉センターの管理、統制を行っている。

また、住民参加型ネットワークを作り、医療、介護、支援関係者との連絡協議会の設置、研修会開催を設け、医師、訪問看護師、ホームヘルパー、介護支援専門員の間に連携システムをとり、事業所の間で情報を電子データで共有、利用者の患部等のデータを保存、対

応の方法についてカンファレンス、パソコン等情報機器の整備を徹底し医療・介護を手厚くサポートしている。相談状況は1,619件（平成19)、2,787件（平成22)、 3,820件（平成25）と年々増加傾向が続いている。25年度の相談内容をみると、介護保険サービス関連（1,263件)、困難事例関連（456件)、認知症関連（291件）等となっている。認知症、困難事例の伸びが大きくなっていることがわかる

利賀村では 2 月上旬ごろに南砺利賀そば祭りが行われている。数少ない利賀に住む人が集うイベントとあって人の賑わいが目立つ。富山県立利賀芸術公園を下に下るとある、明け開かれた敷地と公民館の中で祭りは行われている。冬季の演劇活動に参加している SCOT も参加しての、行事であるためその規模は大きい。屋外では氷晶造形が何個も鎮座しており、すべてが手作りである。先に述べた通り、冬季期間の積雪が非常に多いため、雪崩や地滑りが起こり、規模が縮小される、取りやめになるなどの少なからずの弊害が生じることもあるが、その地に住む人との交流を交わせる貴重なイベントである。

そば祭りの立役者は、中谷信一氏という人物である。中谷氏は生富山県南砺市利賀村の出身であり、この功績から「そばによる国際交流とむらおこしのカリスマ」と呼ばれている。

中谷氏は先に述べた、1982年の夏にSCOT中心で行われた「利賀フェスティバル」の反響ぶりにいたく感銘し、利賀村の職員として参加し得たものを大きく感じ、小さな山村から世界に通じるものを作ることができることを確信した。また同時に豪雪に覆われる冬にも何かできないかと考え始めた。 特に村内各集落で行われていた「ごんべ」と呼ばれるそば会に着目した。出稼ぎから帰ってきた人や遠来の客をもてなすため、そばを打ち、山菜を並べる、村民の心づくしの宴である。集落によっては有志による雪祭りを同時開催していたところもあり、中谷氏はこれらを一つに結集し、そばも雪も大いに楽しめるようにスケールアップした「利賀そば祭り」を考案した。

当初は反対論が多かったが中谷氏は世界演劇祭の成功の経験から、開催の成功を確信する。主だった取り組みとして、道路脇の雪の壁には数千もの小さなかまくらを掘りローソクを灯し幻想的な世界のエントランスを演出、村民総参加で造り上げた雪像をライトアップするなど、新しい手法、奇抜な手法を取り入れた。その結果、昭和60年2月に開催された第 1 回のそば祭りには、予想をはるかに上回る 5,000 人もの観光客が訪れ、用意していたそばがあっという間になくなってしまうほどの大盛況となった。このそば祭りの成功により村民は大きな自信を持ち、「そば」で利賀村の村おこしを行うことに誰もが理解を示したのである。現在では3日間の開催で25,000人もの観光客を集める北陸最大の冬のイベントに成長している。

中谷氏は、成功したそば祭りを見てそばを通年観光の目玉にしようと「そば博物館」作りを計画し、当時の野原啓蔵村長に打ち明けた。野原村長もまたそば祭りの成功で中谷氏のアイデアを採用し、翌年1月に全国初の「日本そば博物館」の建設構想を村内に発表した。中谷氏は、信州大学農学部でそば博士と呼ばれている氏原暉男教授の研究室を訪ね指

導を仰ぐと、氏原教授は「世界のそばの原産地の一つでネパールに紅いそばの咲く村がある」という話を聞く。ネパールに出張する氏原教授に、そばにまつわる民具などを集めてもらえないか依頼したところ、帰国した氏原教授は、140 点もの民具に加えて、友好村提携の話まで土産に持ち帰ってきた。さっそく中谷氏は村から友好調査団の派遣を検討。スピーディーな行動で、当時の宮崎道正村長を団長とする友好調査団が派遣され、そばの原産地のひとつであるネパール王国・ツクチェ村を訪問し、友好村の提携調印を果たした。かくして、そば博物館構想は、目玉となるネパールからの資料を展示したそばの資料館、そば打ち体験館、そば屋などの複合施設である「そばの郷」が平成 2 年にオープンするという形で結実した。

現在では温泉施設も整備され、利賀村の体験型・滞在型ツーリズムの核として、年間約 3 万人の観光客で賑わっている。その後中谷氏はネパール王国・ツクチェ村を訪れること十数回に及び、そばをきっかけにしたさまざまな交流を深めていった。ツクチェ村は曼荼羅を配した寺院があるチベット仏教の信仰の深い村で、中谷氏は始めて訪れた時その曼荼羅の美しさに惹かれ、また、その曼荼羅を見る自分の心が少しずつ、リフレッシュされていくのに気づいた。

中谷氏は、これをきっかけに、現代社会の一番大事な「癒し」を得るために曼荼羅を展示した施設を山村につくることを計画し、都市住民が心身リフレッシュできるための「瞑想の郷」づくりを提案した。村では、村おこしの新たな展開として、国際交流にも資する中谷氏の提案を受け入れた「瞑想の郷」建設に着手した。曼荼羅はツクチェ村出身の絵師を招いて描いてもらうこととなり、その結果 1 年の製作期間を経て、4 メートル四方の大曼陀羅ができあがった。

「瞑想の郷」は平成 3 年にオープンし、中谷氏は「瞑想の郷」を管理運営する国際山村文化体験村事務局の事務局長として、いっそう観光と世界交流に打ち込むこととなった。現在では、「瞑想の郷」はネパール文化の発信施設として年間 1 万人を超える観光客が訪れ、村の観光施設の顔となっている。中谷氏は、「そば」によるむらおこしを実践するためには、「そばの利賀」というブランドの定着が必要と考え、これまでの活動で培った有識者、そば打ち名人らとのネットワークから、そば談議等を随時開催し、さらなる人脈づくりに励んでいた。

折しも、富山県が初めて開催する地方博覧会「ジャパンエキスポ富山」の話が持ち上がり、県下の各市町村にも協賛イベントの開催等の協力が求められたことを機に、中谷氏は、利賀村ではそば博覧会の開催を提唱した。開催するなら世界そば博覧会にしようと中谷氏は意気込んだ。ところが、村役場の中では、各地の地方博が軒並み失敗に終わった状況下で、そばの博覧会など考えられない、と慎重論が相次いだ。中谷氏は何度も企画書を練り直し、粘り強く説得を続け、ついに宮崎村長の開催決定の判断を得た。

中谷氏は博覧会準備室次長として、さっそく企画を実行に移した。外国から「そば料理」の出展にフランスをはじめとする 7 カ国の招待、更にバザール等の営業にギリシャをはじ

め 8 カ国が営業参加をしてくれた。また、中谷氏自ら全国各地をかけ周り、協力依頼、出演・出展依頼などに奔走した結果、38 市町村の参加協力を得た。さらには運営スタッフとして全国から 148 名の助っ人隊を採用することに成功した。

こうして準備を整え、1992 年 8 月、世界そば博覧会が開幕した。開催日数は実に３１日間に及び、世界演劇祭やそば祭りをはるかに超える大きなスケールのイベントとなった。その結果参加者は 13 万 6500 人に達し、大盛況のうちに終えることができた。さらに中谷氏は、博覧会を契機に、そばでつながる地域、団体などが連携を持ってそば文化を継承、発展させていく組織「全国麺類文化地域間交流推進協議会」を立ち上げ、本部事務局を利賀村に設置し、自ら事務局長に就任した。協議会では、そば博覧会を各地持ち回りで開催するようになったほか、素人そば打ち段位認定制度を独自に創設。現在では 60 団体を超える会員と 1,200 人を超えるそば打ち段位取得者を抱えるに至っている。

そばをきっかけにしたネパール王国ツクチェ村との交流が続く中、日本国とネパール王国の国交樹立 40 周年に合わせ、平成 8（1996）年 3 月にネパール王国の首都カトマンズにおいて「利賀・ツクチェ村おこし交流展 in ネパール」を開催した。この交流展には利賀・ツクチェ両村から各 100 名の村民が参加し、２日間にわたり、ネパール王国副首相・在ネパール日本大使らの出席のもと、記念式典及びシンポジウムを開催した。

ちなみに、この交流展にはもう一つ目的があり、ツクチェ村が村内を流れるカリ・ガンダキ川による侵食にあい、毎年のように耕地が狭められ転居を余儀なくされていたことから、日本・ネパール両国政府へ協力を求めることとしたものである。これについては、席上、在ネパール日本大使が援助を約束することで実現した。中谷氏はこのようなイベントでも、企画・運営・渉外など中心的な役割を果たしている。

中谷氏は若い頃から林業を営む父の影響を受けて、木を使った工作、からくりに興味を持ち始め、自宅そばにキツツキ工房を設立し、二十代半ばにからくり仕掛けの木挽人形などを制作、発表している。作品の郷土玩具は、木のやさしさ、手づくりのぬくもりを感じる都市住民に取り入れられている。また、中谷氏は絵本画家・金沢佑光氏に出会い、本格的な木による郷土玩具の世界に目覚め、郷土玩具制作のかたわら全国から木の玩具を収集している。収集した郷土玩具や古いおもちゃなどは、自宅の一部を改造して開設した「郷土玩具美術館」に展示するようにした。現在では年間 6,000 人を超える観光客が訪れ、村の観光名所の一つとなっている。

中谷氏の数々の取り組みもあって、昭和 50 年には 10 万人であった利賀村への入り込み観光客は、現在では４倍の 40 万人までになっている。利賀そば祭りもすっかり定着したイベントとなり、ここ数年は祭りに来訪する観光客の数も２万人台で安定するようになってきた。

惜しくも 2016 年度の開催は中止になったが、それでも日程と時間をずらし、小規模ながら行っていた。先に述べた、過去の並々ならぬ開催成功のための尽力と今の利賀村そば祭りのスタッフの尽力のたまものである。そうして演劇以外の特色も生かしているのである。

8章：個人見解

SCOTの演劇活動の、中高生演劇ワークショップに2度ほど参加したことがある。ただ、あまりにも参加している同年代の人が少なかったことが印象にある。ここまでの県と市が全力で取り組んで、活性化させようとしていても、致命的に知名度が足りないように感じる。筆者自身がこの活動に気が付いたのもなんのカラーも大見開きにもされていない新聞の小さな記事を読んで知ったのだ。はたして中学生の段階でそんな隅々まで新聞を読む人がどれだけいるだろうか。同じく、ワークショップに参加していた同い年ぐらいの少年に聞いてみた、なぜ参加しているのかと。答えは、前の先輩たちも参加していたからというものだった。

調べた資料から鑑みるに、富山県は本腰をいれてこの取り組みを県にとって重要度高く取り組んでいるように見受けられる。しかし、県民の支持と関心は、現状寄せているだろうか。

他の事例であるが、富山県出身のアニメーション監督、細田守監督。主だった作品は「おおかみこども」や「サマーウォーズ」などが挙げられるが、作品名を知っていても、監督が富山県出身であること、またはこれら作品がどういった監督に作られているかとは知らない人が多い気がする。かくいう、筆者の友人も作品名は知っていても、監督名を知らなかったといった具合に周知の広さはまちまちであった。

つまり、SCOTの事例も含め、この問題の根幹は、多くの人に周知されていなく、内輪だけで、それこそ、第一者と第二者とわずかなファンしか知られていないことではないか。よって、発展しない。知っているものだけが楽しみ、知らないものは楽しめない。

利賀村は冬になると、車の通行さえ適わなくなるような、そんな偏狭な土地だ。演劇の指導と演習には適材適所な場所であろう。また、夏の時期は主だったイベントが行われているため環境は整っている。だが整いすぎて、閉鎖的になっていないかという疑念も生まれてくる。閉鎖的に関係者だけが楽しめばそれでいいという信念であるならば果たして利賀村で行う意味はあるのだろうか。そうしたものは小劇場などで開催すると良い。閉鎖的であるとすると、SCOTが訪れる前の利賀村の様子と変わりない。そうなるとなぜいる必要があるのかというところまで問題が帰結してしまうことは言うに及ばないだろう。

なぜ富山県の南砺市の利賀村でワークショップを行う必要があるのか。これが原点にして頂点の問題だ。そしてこの答えは富山県民を南砺市に利賀村に赴く動機付けの一端にするためではないのか、筆者はそう考える。そうであったと仮定した場合、富山県はまったく県民の関心をSCOTに集めようとしていない。中高生が無料で演技指導してもらえる機会であると共に、その演技のほどを披露する場で劇団の人とも同じになって舞台に立つことができる。こんなにも名誉なことがあろうか。演劇を志す中高生、発生練習にも打ってつけではないか。その参加してくれた中高生がまた関心をもって再度訪れてくれるかもしれない。親御さんもつれてきてくれかもしれない。そういった可能性と期待を持てないのか。そういった目的で特に県内に更にSCOTの活動を発信していくべきではないのか。筆者と別

の学校で参加した中学生の言い分は、さらに細かく言うなら、部活の先生がすすめてきたからだそうだ。自発的に参加したものではないという話なのである。新聞の小さな記事で応募しようとは思わないゆえに仕方ないと思ったが、筆者はその返答に少しばかり失望してしまった。

繰り返すが筆者は、新聞を読む癖があったのはそうだが、小さな新聞の記事でこの取り組みを知った。それ以上の情報はまったく持っていなかった。本当に中高生に SCOT の活動に参加させたいのか謎である。宣伝効果など甚だしかった。

つまり、県の取り組み次第なのだ。筆者はその小さな記事で知った、そしてこうして調べ、県が、SCOT が様々な経緯を経て、利賀村の演劇活動に取り組んできたことがわかった。調べる前の自分ではまったく知らなかった組織まで、果ては国を飛び越え、多くの外国の国と演劇を通して交流していることを知った。この自分が生まれた土地でここまでグローバルな活動がされているとは予想だしていなかった。だからこそ、県をもっと誇るべきだ。そして、県内の子供たちに演じることの楽しさを富山でも本格的に、学べることを知らせるべきだ。

このワークショップは、いや、この活動そのものが県民の理解と共感があってこそではないか。そうであれば、今の知名度の広げ方は根本的におかしい。まるで適度な人だけ来てくれて、ワークショップは成功したとありたいていに結果だけ残せば良いと、そうとらえてしまうのは早計だろうか。誰のために何のために行っているのだろうか。県民が知らないような活動をしていて本当に富山県のメリットになるのだろうか。筆者は、メリットにはならないと考える。だからこそ、自身のできる範囲で身内に SCOT の活動とそれを支える富山県の取り組みを広めていきたいと考える。

参考・引用文献

○富山県「富山県」http://www.pref.toyama.jp/　(2018/01/12)
○関西電力「黒部ダム」http://www.kurobe-dam.com/　(2018/01/12)
○富山県
http://www.nga.gr.jp/ikkrwebBrowse/material/files/group/3/basuiibunkageijitsuokatsuyoyshitachii.pdfhttp://　(2018/01/12)
○事業構想「利賀村について」
https://www.projectdesign.jp/201406/pn-toyama/001420.php
www.togapk.net/kouryukan/　(2018/01/12)
○富山県利賀芸術公園「利賀演劇人コンクール」http://togaconcour.tumblr.com/　(2018/01/12)
○南砺市「クリエイティブビレッジ」
https://www.city.nanto.toyama.jp/cms-sypher/open_imgs/info/0000046977.pdf(2018/01/12)
○南砺市「南砺市の地域包括医療・ケアの現状について」
https://www.city.nanto.toyama.jp/cms-sypher/open_imgs/info/0000043378.pdf　(2018/01/12)
○南砺市「南砺市の観光の現状と課題」
https://www.city.nanto.toyama.jp/cms-sypher/open_imgs/info/0000035130.pdf　(2018/01/12)
○富山県利賀芸術公園「利賀芸術公園」http://www.togapk.net/(2018/01/12)